自転車社会の環境改善を目指して　No.45

家族が笑顔で暮らせるために

文　Wa-Life Labo（わらいふ ラボ）代表
http：//walifelabo.com/
社会教育クリエイター 自転車安全利用コンサルタント
北方真起

自転車活用推進研究会 事務局：
〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-3-1 自転車総合ビル４階
TEL 080-3918-2932　　URL http://www.cyclists.jp/

4,000人の親子に会って わかったこと、感じたこと

自転車に幼児を乗せたことのある保護者の11人に1人が、同乗している幼児にケガをさせた事故の経験があるというデータをご存知でしょうか？（警視庁まとめの資料による）

これまで、自転車安全利用や子育てに関する講座・講演などを通じて、六年間で約4,000名の保護者や子どもたちにお会いし、家族が笑顔で暮らせるための活動を行ってきた。

かつて小学校教諭を目指していた私が、この自転車安全利用啓発活動を始めた主な理由は、恥ずかしながら、自らの自転車事故の経験からだ。

忘れもしない、数年前のある夏の暑い日。自転車の後部座席に、当時2歳の娘を乗せて走っていた時のこと。歩道を通って、駐車場に止めようと下がってきた一台の車が目の前に現れた。「大丈夫。車が止まってくれるだろう。自転車や歩行者は守られているから、平気！」そんな考えが頭をよぎり、止まらずに走行しようとした、その時。こちらの存在に気づかず、下がり続けて来た車にぶつかり転倒。スピードは全く出ておらず、ヘルメットをかぶっていたこともあり、幸い、ほとんどケガはなかった。しかし、救急隊員、警察官が次々に到着し、現場検証が行われる中、娘は号泣。「じてんしゃ、こわい！もうのらない！」と、片言ながらも、そればかりを繰り返し叫んでいた。わたしたちの前を一人で走っていた息子も「怖いから、もう自転車には乗りたくない。」と言うようになった。

育児・家事・仕事をしている私にとって、自転車は欠かすことのできない大切な存在。しかも、それまでは、家族でとても楽しく自転車を利用できていたのに、なぜ、私は自転車事故にあったのか。事故以来、その理由を探るべく、インターネットや書籍等を使って、自転車のルールやマナーについて調べ始めた。調べれば調べるほど、初めて知ることの多さに驚いた。自分自身の意識と知識の甘さに、反省すると同時に、このことを周りのママ・パパにも伝えなければ！と思い始めた。

保護者向けに、子育てコミュニケーションに関する講座を開催していたこともあり、同じような形で、子育て中の親子に、自転車についても伝えてみよう！と思い立ったのが、全ての始まりだった。

各地で参加者のママ・パパに聞かれること。その大半は「自転車はいったい、どこを通ればいいの？」そして「自転車はどうやって選べばいいの？」という問い。今さら自転車のルールを聞ける人も周りにいないが、子どもを乗せて安全に利用したい！そんな思いにあふれている。しかし、わざわざ警察署まで出向き、ルールを聞きに行くほどのことでもない。そう思い、疑問や不安を閉じ込めている保護者の多いことに、毎回驚かされる。

私が主催する自転車安全講座では、主に二つのことを留意し構成を行っている。一つ目は、一方的な指導は行わず、参加型のワークショップ形式をとること。「受講」してもらうのではなく「参加」してもらい、自転車のことを「自分事」として考えてもらうことを目的としている。

もう一つは「知識を伝える」のでなく、「意識を変える」ことを目的としていること。講座では必ず、自転車安全利用五則を伝え、ひとつひとつの内容を説明している。しかし、「伝える」ことはゴールではない。いかに、保護者の意識を変え、参加後に安全に留意して自転車に楽しく乗ってもらうか。そこがゴール。そのためにあえて、自転車事故の悲惨な話もお伝えする。同時に、同じ子育て中の参加者同士のヒヤリ体験、事故経験も発表し合う。これらの過程は、自転車のことを「他人事」ではなく、「自分事」に近づけていく。行動変容を起こすポイントは、「恐怖」と「共感」にあると考えているからだ。

今後、取り組んでいきたいことは沢山あるが、特に注力していきたい

協力させていただいている「さいたま市 子育てパパ・ママ自転車　アシストプロジェクト」の自転車安全講座での一コマ

ことは主に三つ。一つ目は、「ヘルメットの着用啓発」。先般、協力させていただいた、株式会社オージーケーカブトの子どもの自転車ヘルメットの着用実態調査では、実に興味深い結果が出ている。自転車用ヘルメットは、事故や転倒の際に「頭部の怪我を防げる」とほとんどの保護者（92.3%）は認識しながらも、未だ、6割近くは未着用であることがわかった。また、2年前の調査と比較すると、着用率は増加基調ではあるが、同時に、「ヘルメットを持っていない」非保有率が増加するという傾向も見られた。

自転車事故の大半は自転車の転倒によるもので、そのケガの約4割は、頭や顔のケガ。一歩間違えると致命傷になりかねない。そこで重要なのがヘルメット。正しく装着することで、転倒時の頭部にかかる圧力は4分の1程度まで低くなるという検証結果がある。子どもはもちろん、中高生、女性、高齢者へのヘルメット着用の啓発に、今後はさらに力を注いでいきたいと考えている。

二つ目は、「コミュニケーションとしての自転車」だ。自転車を単なる移動手段・スポーツとしてとらえるのではなく、家族のコミュニケーションのきっかけとしてとらえ、利用してほしい。子どもにとって、初めての自転車は特別なものだ。お父さん、お母さんと一緒に乗る自転車は、五感を通じた経験をさせてくれる。同時に、親子の自転車時間は、子どもにとって、初めての交通教育を学べる時間にもなる。自転車に乗りながら、信号や標識の見かた、道路のどこをどのように走るのか、などを子どもに直接教えることのできる絶好の機会となる。単なる「移動」ではなく、「親子で楽しむ時間」「子どもに交通ルールを伝えられる時間」。そんな風にとらえ、有意義に活用してもらえるよう、今後も啓発を続けていきたい。

三つ目は、「誰もが住みやすいまちづくり」に関わること。子どもを持って、初めてわかること。身体が不自由になって初めてわかることがある。年齢や障害の有無にかかわらず、「ユニバーサルデザイン」の観点から、多くの方が安全に、そして快適に暮らせるためのまちづくりにこれからも積極的に関わっていきたいと考えている。

先述の調査で、もうひとつ、興味深い結果が出ている。自転車は車道を走る義務を8割以上が知っているが、実際は7割弱が、主に歩道を走行していることがわかった。ここには、車道を通りたくても通れない、沢山の要因が隠されているだろう。走行空間というハードの部分、教育、啓発などのソフトの部分。その両方を多様な視点を持って進めていくことが重要ではないだろうか。

＊　＊　＊　＊　＊

さて、これらの啓発活動を継続する上で、もたらす効果を測ることはとても重要だ。しかし、個人情報の観点等から、参加者のその後を追い、意識や行動変化などを調査することは極めて難しく、この部分が今後の課題でもある。

開始当時、この活動は本当に意味があるだろうか？　参加してくれた親子は、その後も自転車のルールを守り、ヘルメットをかぶり、安全に留意して、楽しく自転車に乗っているだろうか？という疑問を持った。

そんな疑問がつのり、活動の継続を迷っていたある日のこと。突然、一本の電話がかかってきた。主催した講座に参加されたママからのもので、声は震えていた。

「事故にはあったものの、北方さんの話を聞き、ヘルメットの重要性を学び、着用していたおかげで、ケガはなく、息子の命を守ることができた！」というお礼の電話だった。「事故」の言葉に、息をするのも忘れるくらい驚く一方、お子さんが無事であったと聞き、心から安堵した。そして、何度もお礼を言うその方に「お子さんのケガがなく済んだのは、学んだことを知識に終わらせず、行動を変えたお母さんのおかげだと思います」とお伝えした。

自転車利用時の安全意識を伝える活動がきっかけで、一人の尊い命が救われたのであるならば、まぎれもなく意義のある活動であり、これからも、出会ってくれる方々のために、精一杯、伝えていこう！と心に誓った日となった。

この世から悲しい事故がなくなるその日まで、そして、誰もが安全に楽しく暮らせる社会になるまで、自転車のルールを伝え、利用者として、保護者としての意識を伝え続けていきたい。そして、家族が笑顔で暮らせる社会づくりのために、今後も「自転車」「子育て」「教育」「家族の笑顔」をキーワードに、活動を続けていきたいと思っている。 PP

「自転車検定」を始めました

インターネットで、いつでも受験できる「自転車検定」サイトを設けました。無料のお試し検定も行っています。
自転車活用推進研究会のホームページ〈http://www.cyclists.jp/〉からどうぞ。